
宇宙の車窓から

伊達メガネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙の車窓から

【Nコード】

N6144A

【作者名】

伊達メガネ

【あらすじ】

宇宙を放浪の旅をする青年を描いたファンタジー小説。

プロローグ

時は3000年を過ぎ、地球の化学技術は著しい進化を遂げた。

地球の人々は昔からの夢『宇宙への旅』すらも成し遂げた。

しかし、宇宙へ進めば進むほど、地球人は他の星々との対立は深まっていった。

そして、銀河系の生物たちはついに『宇宙戦争』を起こした。

多くの尊い生命を奪い取り、最終的には銀河系の星の約48%は無くなってしまった……。

この物語は、『宇宙戦争』が終戦した、10年後のある男の物語である。

車内より

「……さん」

誰かが呼んでいる。

「……トさん」

少し低い声の、男の声。

「カイトさん」

「うーん、ああ、おはよう車掌さん」

カイトと呼ばれた男は、あくびをしながら答えた。

見かけは二十歳くらいで、黒いコートと中に白いシャツを着ており、ジーパンをはいている。

車掌と呼ばれた、少し背の低い、初老の男が

「そろそろ、次の星に着きますよ」

と言った。

カイトは寝そべっていたシートから起き上がり、背伸びをした。

カイトの頭30cmほど上には天井があり、かなり煤汚れている。

蛍光灯が、点いたり消えたりしていた。

「もうですか、早いですね。まあそろそろ食料もなくなってきたし、丁度いいかな？」

と、言った瞬間

ぼおおおおおおおお

と無駄に大きい音、汽笛が鳴った。

窓の外は、黒い煙が一面に広がっていた。車内にも黒い煙が入り込み、やたらと臭かった。

「着きましたよ、惑星MP3です」

車掌は何も無かったかのように言い、

「うーっぷ、この匂いは慣れられないなあ……」

カイトはこの匂いに苦しんでいた。

「ははは、この匂いにはすぐ慣れますよ」

車掌は高らかに笑い、

「……何百年もこの匂いを嗅ぎ続けている人が言っても、説得力ないですよ……」

カイトが不快そうに言った。

匂いが消えてるとカイトは、大きく深呼吸をし、肺の中の空気を入れ替えた。

「ふうー、じゃあ、ちよっくら行ってきましたね」

「はい、行ってるっしやいませ。良い観光を」

列車を下りていくカイトを、車掌は満面の笑みで見送った。

列車を降りると、カイトの視界に美しい光景が広がった。木々（といっても、あくまでそう見えるだけ）は青々と茂り、花（といっても、あくまであくまでそう見えるだけ）生物達（といっても、あくまであくまであくまでそう見えるだけ）は活き活きと野を飛び跳ねていた。

「へえー、綺麗な星だなあ」

「@* & a m p ; + ? 、 ! ” # \$ % & a m p ; 」

重い意味不明な声が、どこからか聞こえる。

「へえ……って、うおーい！？ なんなんだ、じいさん、いきなり！！？」

いきなりかなり年の老けたおじいさん（といってもそう見えるだけで彼は宇宙人である）が話し掛けてきたので、カイトは心底驚いた。

（しかも何言ってるか分かんない……そうだ、『翻訳しまっしゅ』のスイッチいれるの忘れてた！）

『翻訳しまっしゅ』とは、全宇宙の言語を翻訳してくれる、ありがたいアイテムである。

急いでそのスイッチを入れたカイトは、このいきなり話し掛け

てきた『人』を見た。

見かけは背丈が高く、尖った耳のようなものを持っていて、逞しい体を持っていた。目はかなり吊り上っている。

「あのー、あなた、は？」

カイトは恐る恐る聞いた。

「わしはゴハンバス。この星の『門番』じゃよ」

ゴハンバスと名乗った者はカイトをじろじろ眺めてきた。カイトは少々怯えている。

「アンタ、何者じゃい？」

いきなり聞いてきた。

「えっと、俺はカイト。宇宙を旅してる者です。先程この星に入ってきたんで、一応星に入る許可が欲しいな……と」

語尾がうんと小さくなってしまった自己紹介を終えた。

カイトがドキドキしながら返事を待っていると、

「別に構わんよ？ 何も無い星じゃが」

あっという間に許可が下りた。

惑星MP3

カイトは『門番』から星に入る許可をもらい惑星MP3に入った。相変わらず星には美しい光景が広がっている。

カイトは肺いっぱい酸素を取り込み、元気良く歩いていった。(このときカイトはこの星に酸素があつてよかった、と心底思っている)

「さて、買い物にでも行こうかな」
下手な鼻歌を鳴らしていた。

「いらっしゃい、ありゃ、旅人さんなんて久しぶりだねえ」
かなり太った、大柄な女性(?)が話し掛けてきた。
額には美しい褐色の宝石のようなものが付いていた。

「?なんで旅人と分かったんですか?」

「そりゃ、アンタが腰に提げてる剣みたいなので分かるさ。でも、なんで旅なんか しているんだい?」

「……」

「言えない理由があるみたいだね……。まあ、人は誰しも何かを背負っているからね、アンタは特に重たいもの背負っているみたいだね」

カイトは黙り込む。

「まあ、いいや。この星は初めてかい?」

大柄な女性が聞き、カイトが答える。

「はい、まあ、一応」

「なら、この星について色々教えてあげるよ」

惑星MP3には『宇宙戦争』の被害に遭わなかったこと。

「あ、それ『門番』さんから聞きました」

「あの、屁理屈じじいめ……。まあいいや、続けるよ」

惑星MP3にいる生物の特長、額に美しい水晶のようなものがある

ること。

この星には3つの身分があり、上、中、下に分かれていること。
額のものの色が美しいほど、高貴な存在だということ。

「へえー、よく分かりました。だからオバサンには水晶が付いてるんですね」

「オバ……」

額にビシッ、と青筋が立った。この辺は地球と自分の星と変わらないなあ、とカイトは口に出さないよう、心の中で思った。

「色々教えてやったんだから、5個以上買っておくれよね」

「う、悪徳商売……」

「なんか言ったかい？」

カイトはこの人に逆らえないと瞬時に悟り、黙って言う事を聞く事にした。

「いえ、何も……」

無理矢理、雑貨屋に大量購入を余儀なくされたカイトは

「……財布の中身が……」

振っても塵しかでてこない財布を未練がましく見つつ、歩いていると

ごんごんごんごんごんごんごんごんごんごん

突然、星そのものが揺れているような轟音で

「うわぁ!？」

しりもちをついてしまったカイトはおもむろに空を見上げると

「!？」

轟音とともに

「あれは、まさか……」

巨大な塊が

「でも、何故!？」

降りてくるのを、啞然として眺めていた。

辺りはいつの間にか、悲鳴や絶叫が飛び交っている。

天から降ってきたのは……

「宇宙海賊、かよ……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6144a/>

宇宙の車窓から

2011年1月16日01時56分発行